



バラの新芽にびっしりついたアリマキは、どこからきたの

1日に5～10ぴきもの子虫（幼虫）が生まれる

ある日、わき出したように見えるアリマキは、どこかに卵があったのです。あるいは、羽の生えたアリマキがどこかから飛んできて、たくさん子どもを産んでふえたのです。

春に卵から生まれたアリマキのメスは、オスがいないまま、1日に5～10ぴきもの子虫を、どんどん産みます。生まれた子虫は、全部メスで、4～7日たつと成虫になり、すぐ子虫を産みはじめます。およその計算をすると、1ぴきのメスが、数か月で数億ひきのアリマキにふえるといえるほどです。ですから、あっという間に、新芽のまわりなどが、アリマキでびっしりになるのです。

えさが不足すると、羽があるアリマキが生まれる

アリマキは、やわらかい植物のくきなどから、植物の栄養分を吸って生きています。あまり数がふえすぎると、一つの枝の先などだけでは、えさがたりなくなってきます。栄養が不足してくると、羽の生えたアリマキが現れます。この羽の生えたアリマキは、アリマキの種類によって決まっている、えさになる植物を探して、飛び立ちます。見つけた新しい植物の新芽で、また、子虫をどんどん産んでふえていきます。

卵を産むため、秋だけオスが生まれる

秋になると、オスや、卵を産むメスの子虫が生まれてきます。そして、このオスとメスが交尾（親の性質を伝える遺伝子をわたす）して、メスは卵を産みます。この卵が冬をこし、春になって、ふ化すると、子虫をたくさん産むメスになります。

（監修・中山 周平）

